

# 『谷中七福神を語る』

——江戸最古を誇る七福神——

日 時 平成 21 年 1 月 3 日 (土)

集合場所 8 : 3 0 越谷駅東口集合

8 : 4 2 急行浅草行

越谷駅—北千住駅《乗換》—日暮里駅《乗換》—田端駅

コース (9 時 30 分から 1 2 時)

田端駅→《田端文士村》八幡神社・東覚寺 (福祿寿・赤紙仁王) →《道灌山・散策》→《ひぐらしの里・散策》西日暮里公園・青雲寺 (恵比寿・滝沢馬琴の筆塚)・修性院 (布袋) →《谷中寺町・散策》経王寺 (大黒・上野戦争の銃弾痕の山門)・長安寺 (寿老人・狩野芳崖の墓)・谷中五重塔跡・天王寺 (毘沙門) →《上野の山》護国院 (大黒)・不忍池弁天堂 (弁天) 《1 2 時解散予定》



N P O 法人・越谷市郷土研究会

# 谷中七福神を詣でる

加藤幸一

## 江戸最古の谷中七福神

谷中七福神は、宝暦年間（一七五一〜六四）に始まり、江戸最古であるとされる。江戸風俗総まくり「谷中・日暮里に春のあした（朝）、七福神詣という事ありて、今の天王寺の毘沙門天、護国院の大黒天、池之端の弁天、笠森（笠森稻荷・功德林寺）脇の寿老人、田畑（田端）の恵比寿、西行庵の福祿寿、日暮里（ひぐらしの里）の布袋なり」とある。

谷中七福神は、今の組み合わせが江戸時代から限られていたわけではなく、大黒天・恵比寿は神田明神・清水（きよみず）観音堂、大黒天は経王寺、毘沙門天は谷中本通寺、弁財天は北町の養泉寺とすることもあった。

※インターネット「谷中七福神『江戸歴史散歩』（江戸歴史散歩の会）を参照しました。

## 田端文士村記念館

（入館無料・月曜と年末年始は休館）

北区田端六一二二

明治中期まで、田端は閑静な農村でしたが、明治二十二年、上野に東京美術学校（現、芸大）が開校されると、徐々にその姿を変えて行きます。上野とは台地続きで便が良かったことなどから、美校を目指し、学び、巣立った若者たちが田端に住むようになるのです。

明治三十三年・小杉放庵、三十六年・板谷波山、四十年・吉田三郎、四十二年・香取秀真など、芸術家たちが続々と転入。画家を中心としたポプラ倶楽部も誕生するなど、田端は、さながら「芸術家村」でした。

大正三年、ひとつの転機が訪れます。学生・芥川龍之介の転入です。五年には室生犀星も田端に移り住み、競うように作品を発表、名声を高めていきます。ふたりを中心に、やがて菊池寛、堀辰雄、荻原朔太郎、土屋文明らも田端に居を構えるなど、大正から昭和の初期にかけて、田端は「文士村」となったのです。

（田端文士村記念館のパンフより）

## 当時の田端の様子

田端駅は、現在より西日暮里よりあり、文士や芸術家たちはこの駅を利用して、坂を上っていた。その道は、現在の田端駅寄りの歩道（切通しの東側の歩道）にほぼ相当する。

田端は、江戸の町の郊外としての田園風景が広がっていた。

なお、現在の切通しは、昭和初期にできたもので、また、現在の谷田川（やたがわ）通りは、昭和初期まで谷田川が流れていたのである。



## 田端八幡神社

北区田端二二七二一

この八幡神社は、田端村の鎮守として崇拝された神社で、品陀和気命（ほんだわけのみこと・応神天皇）を祭神としています。神社の伝承によれば、文治五年（一一八九）源頼朝が奥州征伐を終えて凱旋するときに鶴岡八幡宮を勧請して創建されたものとされています。別当寺は東覚寺でした。

現在東覚寺の不動堂の前にたっている一对の仁王像（赤紙仁王）は、明治元年（一八六八）の神社分離令の発令によって現在地へ移されるまでは、この神社の参道入口に立っていました。江戸時代には門が閉ざされていて、参詣者が本殿前まで進んで参詣することはできなかったらしく、仁王像のところから参拝するのが通例だったようです。

参道の中程、一の鳥居の手前には石橋が埋められています。これは昭和初期の改修工事によって暗渠となった谷田川（やたがわ）に架かっていたもので、記念保存のためにここへ移されました。

社殿は何度も火災等に遭い、焼失と再建を繰り返しましたが、平成四年（一九九二）に氏子たちの協力のもとで再建され、翌年五月に遷座祭が行われて現在の形になりました。境内には、稲荷社のほかに田端富士三峰講が奉祀する富士浅間社と三峰社があり、富士浅間社では毎年二月二十日に「富士講の初拝み」として祭事が行われています。

平成九年3月

東京都北区教育委員会

## 《福祿寿》 東覚寺（赤紙仁王さん）

### ・赤紙仁王尊について

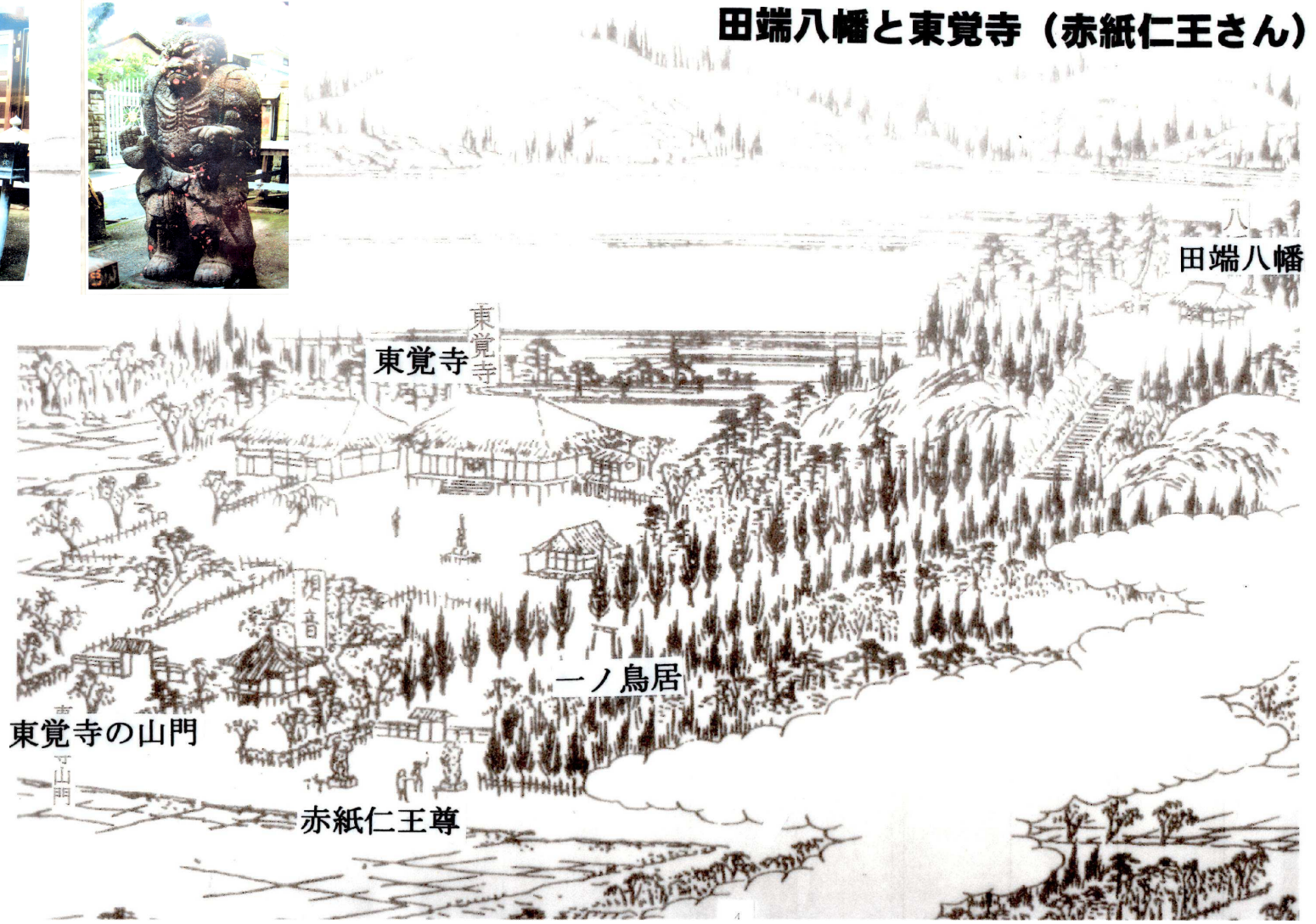
石仏仁王の背銘に「施主道如宗海上人東岳寺賢盛代、寛永十八年巳年八月二十一日」と刻まれている。西暦一六四二年より露仏で立っていることになる。仁王は本来清浄な寺院の境内を悪から守る金剛力士として門の両側に立ち仏法僧の三宝を守護するものであるが、この赤紙仁王は当時江戸市中に流行していた疫病を鎮めるため宗海上人が願主となって建立されたもので、いつのころからか赤紙（魔悪を焼除する火の色）を自分の患部と同じ箇所貼って病氣身代わりと心身安穩を願うようになった。石仁王のあらたかな靈験に、今もなお参詣者は遠近から集まり香煙が絶えない。

右の阿像は口を大きく開け息を吸い込んでいる状態即ち「動」を表し、左の吽（うん）像は口をしつかりと結んで息を止めている状態即ち「静」を表示している。阿吽の姿は密教で説く胎藏界、金剛界の二界を表し又宇宙一切のものの始めと終わりを表している。阿像から吽像へと祈願し満願のあかつきにはお札として草鞋（わらじ）を奉納する。祈願者、病人を見舞うため日夜歩かれるのでさぞかしわらじが必要であろうという思いやりからである。

白龍山 寿命院 東覚寺山主 台掌



# 田端八幡と東覚寺（赤紙仁王さん）



田端八幡

東覚寺  
東覚寺

一ノ鳥居

東覚寺の山門

山門

赤紙仁王尊

## 道灌山

西日暮里四丁目の台地は道灌山とよばれ、江戸時代には眺めがよく、筑波や日光の連山、そして下総国府台（現市川市）などをのぞむことができた。

当時は菓草が豊富で、一年中採取者が訪れたという。また、虫聴きの名所として知られ、涼を求めて人々が集まったところでもある。

安藤広重の錦絵や正岡子規の歌などによっても当時がしのばれる。

荒川区教育委員会

## 道灌山と文人たち

このあたり一帯の台地は、道灌山と呼ばれ、江戸時代は眺めがよく、隅田川や筑波、日光の連山、また、反対側には、富士山がみえた（現在も富士見坂からみることができ）。

当時は、菓草も豊富で「草積み」に、また「虫聴き」「花見」「月見」「雪見」など四季折々に多くの人々が訪れる江戸の景勝地であった。このため、文人・墨客（ぼっかく）との縁も深く、安藤広重の錦絵、太田南畝（なんぼ）の狂歌、正岡子規の歌などの作品も多く、また、青雲寺の滝沢馬琴の「筆塚（ふでづか）・硯塚（すずりづか）」、養福寺の「談林派歴代の句碑」なども残されている。

近くにある開成学園周辺は「日暮里渡辺町」と呼ばれ、大正時代初期に文化的まちづくりが行われ、久保田万太郎（まんたろう）、野上彌生子（やえこ）、石井柏亭（はくてい）など芸術家が数多く居住していた。

荒川区教育委員会

## 道灌山遺跡

昭和二十九年、弥生時代の住居跡が発掘された開成グラウンドほか、西日暮里四丁目の台地上は、縄文時代から江戸時代までの遺跡が残されている地域である。

荒川区教育委員会

## 佐竹屋敷と渡辺町

この付近一帯は、秋田藩主佐竹右京大夫の広大な抱屋敷（かかえやしき）であった。約二万坪（約六万六千平方メートル）に及ぶ敷地内には、「衆楽園」と名づけられた山荘があり、当時、城北屈指の名園として知られていた。

明治以後も佐竹侯爵家が所有していたが、笹や竹が生い茂り、「佐竹っ原」と呼ばれるようになっていた。大正五年に渡辺銀行頭取渡辺治右衛門が入手して、近代的田園都市を目指した団地を造成し、渡辺町と呼ばれるようになった。昭和七年の区制施行時に、日暮里渡辺町になり、同九年には日暮里九丁目に統合された。

荒川区教育委員会





## 西日暮里公園にある解説板より

道灌山は、上野から飛鳥山へと続く台地上に位置します。安政三年（一八五六）の「根岸谷中日暮里豊島辺図」では、現在の西日暮里四丁目付近にその名が記されています。

道灌山の地名の由来として、中世、新堀（日暮里）の土豪、関道閑（せきどうかん）が屋敷を構えたとか、江戸城を築いた太田道灌が出兵（でじろ）を造ったなどの伝承があります。

この公園を含む台地上に広がる寺町あたりは、ひぐらしの里と呼ばれていました。

ひぐらしの里は、江戸時代、人々が日の暮れるのも忘れて四季折々の景色を楽しんだところから、「新堀（にいほり）」に「日暮里」の文字をあてたといわれています。

（以上の文は、荒川区教育委員会の解説版の文に加藤が手を加えたものです。）

道灌山・ひぐらしの里は、荒川区内で最も古い歴史をもつ所です。このあたりから出土した土器や、貝塚・住居址などは、縄文時代から数千年にわたって人々の営みが続けられたことを物語っています。

道灌山・ひぐらしの里は、江戸時代の中頃になると、人々の憩いの場として親しまれるようになりました。道灌山の大半は秋田藩主佐竹氏の抱え屋敷になりますが、東の崖ぎわは人々の行楽地で、筑波・日光の山々などを展望できたといえます。また薬草が豊富で、多くの採取者が訪れました。ひぐらしの里では、寺社が競って庭園を造り、さながら台地全体が一大庭園のようでした。

桃さくら 鯛より酒の さかなには

みどころ多き 日ぐらしの里 十返舎一九

雪見寺（浄光寺）・月見寺（本行寺）・花見寺（妙隆寺＜現在は廃寺＞・修性院・青雲寺）、諏訪台の花見、道灌山の虫聴きなど、長谷川雪且や安藤広重ら著名な絵師の画題となり、今日にその作品が伝えられています。

明治時代、正岡子規も道灌山・ひぐらしの里あたりをめぐり、『道灌山』という紀行文を著しました。

山も無き武蔵野の原をながめけり

車立てたる道灌山の上 子規

昭和四十八年、ここ西日暮里公園が開園し、区民の憩いの場となっています。

江戸時代から明治時代にかけて、道灌山は虫聴きの名所でした。『江戸名所花暦（はなごよみ）』（文化十年「一八二七」刊行、文は岡山鳥「おかさんちょう」で、絵は長谷川雪且「せつたん」）には、次のように書かれています。（略）

虫聴きの名所は、道灌山が最も有名で、とくに松虫が多く、澄んだ音色が聞けたといえます。このほか、真崎（まさき）・南千住の白鬚橋（もと）、隅田川東岸（牛島神社あたり）、三河島辺（荒木田の原あたり）、王子・飛鳥山辺、麻布広尾の原が虫聴きの名所でした。

『東都歳時記』によれば、旧暦七月の末、夏の終わりから秋の初めにかけて、「虫聴き」



が盛んだったと記されています。

道灌山虫聴きの絵は、雪旦、安藤広重、尾形月耕（げっこう）が描いた三種類があります。広重の絵は公園入口脇に模写したものがありません。

尾形月耕は、明治期に活躍した画家で、岡倉天心らとともに、美術界発展に尽くした人です。新聞の口絵・さし絵が有名でした。

この絵は、道灌山に月が昇る頃、中腹にむしろを敷き、虫かごに虫を入れて鳴かせ、たくさんの虫に音色を催促しています。坂を上ってくる女性が足音をしのばせている姿もほほえましく感じます。

この絵は、明治末頃の作と思われませんが、秋の夜長に涼を求めて、老若男女がここに集まり、自然の美しさ、すばらしさを楽しんでいたのです。

## 道灌船繫松（ふなつなぎのまつ）

道灌船繫松のことは、『江戸名所図会』（天保七年刊「一八三六」、斉藤幸雄、幸孝、幸成「月岑・げっしん」の三代三人が文章を書き、長谷川雪旦「せったん」が絵を画く）に詳しく書かれています。

「青雲寺（せいうんじ）の境内、崖に臨みうつそうとしてそびえたり。往古（むかし）は二株（にしゆ）ありしが、一株は往（い）んじ、安永元年の秋、大風に吹き折れて、今は一木のみ残り。（中略）」

或人云（いわ）く、往昔（むかし）このふもとは豊島（としま）川に続きし入江にて、道灌の砦城（とりで）ありし頃は、米穀その外すべて運送の船より、この松を目当にせしものにて、つなぐといふもあながち繋ぎとどむるの義にはあらず、これは舟人の詞（ことば）にして、つなぐといふは目的にするなどいえるに同じ心とぞ。よつてその後、道灌山の船繫の松と称して、はるかにこの所の松を目当にせしを誤りて、道灌船繫の松と唱ふるとぞ。」

長谷川雪旦は、『日暮里（ひぐらしのさと）惣図』と題し、この地域を七枚の絵に描いています。道灌山から諏訪神社、浄光寺、養福寺、本行寺まで、当時の様子がわかります。

道灌船繫松は、この絵の中で台地上に高くそびえています。安永元年（一七七二）の秋大風のため一本が折れ、残り一本になってしまったようです。

この松をなつかしんで、『日暮里繫舟松之碑』が道灌山に建てられましたが、現在は、青雲寺本堂脇に移されています。建碑の年月はわかっていません。天明五年（一七八五）に鳥居清長（とりいきよなが）の描いた墨版（すみばん）『画本物見岡』の「日暮里青雲寺境内」の絵に、この石碑は、安永元年から天明五年までの十三年間に建てられたことがわかります。

道灌山の船繫松は、こここのシンボルであり、近在の人たちに親しまれ、大切にされています。

## 《恵比寿》 滝沢馬琴の筆塚と花見寺（青雲寺）

青雲寺（せいいうんじ）は臨済宗の寺院で浄居山と号する。宝暦年間（一七五一〜六四）、堀田相模守正亮（まさすけ）の中興と伝える。江戸時代の中頃より「日ぐらしの里」と呼ばれ、庶民に親しまれてきたこの地は、四季折々の花を楽しむ人々で賑わった。そのため、青雲寺は修性院・妙隆寺（修性院と合併）などととも、花見寺（はなみでら）ともいわれていた。

現在、谷中七福神のひとつ「恵美寿」が祀られている。境内には、滝沢馬琴の筆塚（ふでづか）の碑（文化六年「一八〇九」をはじめ、硯塚（すずりづか）の碑（寛政十年「一七九八」）、日暮里船繫（ふなつなぎ）松の碑、狂歌師安井甘露庵の碑など、江戸を代表する文人の碑が多く残っている。

荒川区教育委員会

## 《布袋》 日ぐらしの布袋（修性院）

修性院（しゅうせいいん）の布袋は、谷中七福神の一つで、「日ぐらしの布袋」ともよばれる。谷中七福神めぐりは、江戸市中でも最も古い歴史をもち、年始めにあたって江戸市民が行う年中行事の一つであった。

江戸時代の中期ごろから、このあたり一帯は俗に「ひぐらしの里」とよばれ、江戸近郊の行楽地として賑わった。ことに修性院・妙隆寺（修性院に合併）・青雲寺は、境内に多数の花樹を植えて、「花見寺」の名にふさわしい庭園をつくり、四季折々の草花を楽しむことができたという。

境内には、江戸時代の儒者・日尾荊山衣幘碑がある。

荒川区教育委員会

※今はなき妙隆寺は、修性院の向かって右隣（富士見坂の北側）にあった。

## 富士見坂

江戸時代からの古道。坂を上った上では富士山が見られた。

## 六阿弥陀道（ろくあみだみち）

この道に沿って青雲寺、道灌山方面に北上すると、武州六阿弥陀詣での第四番にあたる与楽寺に行く。

武州六阿弥陀詣では、谷中七福神詣でよりも古く、江戸時代初期より行われていた。武州六阿弥陀詣での影響で、この谷中七福神詣でが行われたのではないかと推定されている。



なお、武州六阿弥陀とは、次の通りである。

- 第一番 西福寺（さいふくじ・北区豊島）
- 第二番 延命寺の阿弥陀堂（足立区江北、南東六百m先の恵明〔えみよう〕寺に合併）
- 第三番 無量寺（北区西ヶ原）
- 第四番 与楽寺（北区田端）
- 第五番 常楽院（台東区下谷、調布市の深大寺に合併）
- 第六番 性翁寺（しょうおうじ・足立区扇）

### 慰霊碑由来（日照山法光寺の門前にある石碑より）

ノモンハン事変以来終戦に至るまで陸軍少年飛行兵として戦野に赴きし者約四萬五千にして空陸海に散華せし者数うるに限り無し。

依つて生存者遺族有志等相集りて慰霊の誠を捧げんとして是を建立す。  
行き交う人々心あらば一遍の回向を賜わらんことを。

沙門 某 敬白

### 美濃遠山氏の聖観音（南泉寺）

山号を瑞応山と称する臨済宗妙心派の寺。元和二年（一六一六）徳川家から境内三千二百余坪を拝領し大愚が開創した。その後、將軍家光・家綱に仕えた老女岡野の遺言により貞享三年（一六八六）朱印地三十石を賜った。

本堂内の木造聖観音（しようかんのん）立像は、美濃遠山氏の念持仏。厨子に遠山氏の家紋、「遠山家 息心菴本尊、正観音菩薩、安政四年（一八五七）丁巳星七月十日」の銘がある。上半身等に江戸期の補修が加えられているが、鎌倉期の作と推定される。その他、善光寺式阿弥陀三尊の一部と思われる銅造菩薩立像を所蔵。境内には、菅谷不動、講談師松林伯円の墓等がある。

荒川区教育委員会

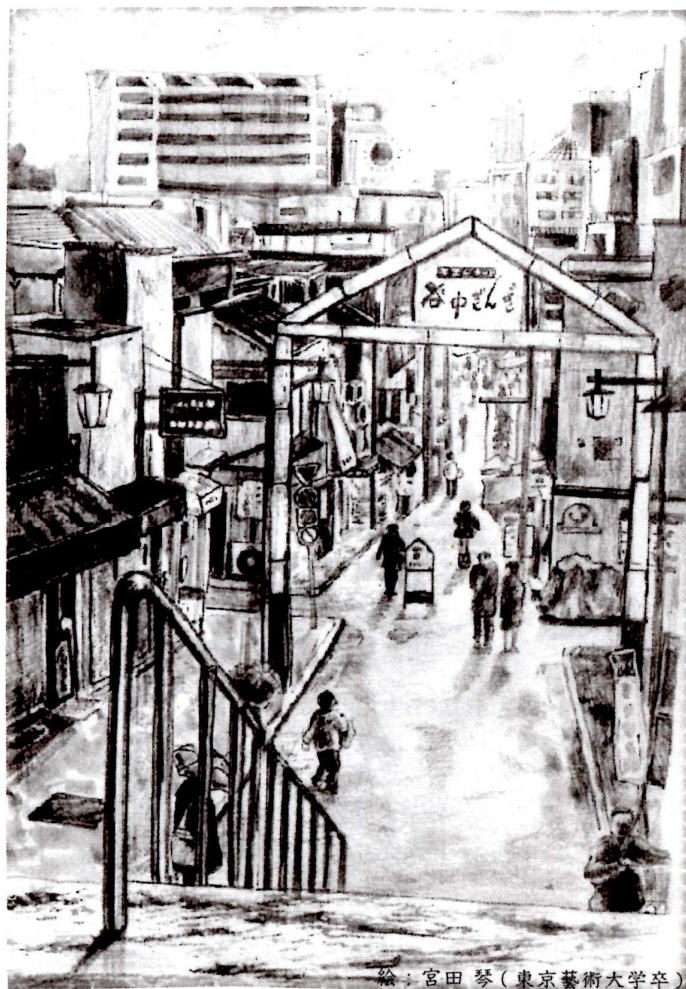
### 夕焼けだんだん

JR「日暮里」駅から「谷中ぎんざ商店街」へと向かう途中にある階段をこのように呼ばれるようになった。「夕焼けだんだん」の名称は平成2年に石段が改装された際の愛称募集時に、タウン誌「谷根千」の編集者である森まゆみさんが応募した名称である。

夕日のあたる頃、階段の上から夕日の沈む「谷中ぎんざ商店街」方面を見ると、そこは懐かしい昭和の光景のようであるという。

インターネットの「夕焼けだんだん・日暮里駅・レッツエンジョイ東京」を参考にした。





絵：宮田 琴（東京藝術大学卒）

夕焼けだんだん

## 《大黒》大黒天 経王寺

経王寺は日蓮宗の寺院で山号を大黒山と称す。明暦元年（一六五五）、当地の豪農冠（かんむり）勝平（新堀村の名主冠権四郎家の祖）が要詮院（ようせんいん）日慶のために寺地を寄進し、堂宇（どうう）を建立したことに始まるという。本堂の隣の大黒堂には日蓮上人の作と伝えられる大黒天が鎮守として祀られており、地域の人々の崇敬を広くあつめている。

慶応四年（一八六八）の上野戦争のとき敗走した彰義隊士をかくまったため、新政府軍の攻撃をうけることとなり、山門には今も銃弾の痕（あと）が残っている。

荒川区教育委員会

谷中七福神めぐりは、現在はここは含まれていないが、江戸時代は大黒天を祀る寺院として、上野の護国院とともに谷中の七福神めぐりの対象に含まれていた。

## 朝倉彫塑館（国名勝・国登録有形文化財）

台東区谷中七丁目十八番十号

近代日本を代表する彫塑家、朝倉文夫（あさくら・ふみお 一八八三〜一九六四）の邸宅兼アトリエである。

朝倉は明治十六年大分県で生まれ、同四十年、東京美術学校（現東京藝術大学）彫刻科を卒業後、当地に住居とアトリエを新築した。その後改築、増築を繰り返し、現存の建物は大半が昭和十年の竣工である。すべて朝倉が設計し、銘木、竹などの材も自ら選んだ。庭との一体感に配慮した独特の空間意匠、造詣が追求され、随所に彫塑家朝倉の個性を見

ることができる。

中庭は、木造和風の住居棟と近代洋風建築のアトリエに囲まれた日本庭園で、空間の大半を水面が占めている。水面に配された五つの巨石が密度の濃い水景を創り上げ、朝倉の芸術思想の特質である自然観をもうかがえる。屋上庭園は、かつて朝倉が昭和二年に自邸とアトリエにおいて開設した「朝倉彫塑塾」の塾生が蔬菜を栽培し、日常の園芸実習の場として使われた菜園であった。昭和初期に遡る屋上庭園の事例としても貴重である。

昭和四十二年、故人の遺志によって一般公開され、同六十一年には台東区に移管され、「台東区立朝倉彫塑館」となった。

平成十三年、建物が国登録有形文化財に、本館所蔵の文夫の代表作「墓守」の石膏原型が重要文化財指定を受けた。同十九年には、建物と庭一帯が国名勝の指定を受けた。

平成二〇年三月

台東区教育委員会

## 赤穂浪士ゆかりの寺

台東区谷中五丁目八番二十八号 観音寺

赤穂浪士の吉良邸討入は「忠臣蔵」の題材として、広く世に知られている。

四十七士に名をつらねる近松勘六行重と奥田貞右衛門行高は、当寺で修行していた文良の兄と弟であった。文良とは、のち当寺第六世となった朝山大和尚のことである。

寺伝によれば、文良は浪士らにでき得る限りの便宜をはかり、寺内ではしばしば彼らの会合が開かれたという。明治末の福本日南の著作「元禄快拳録」には、勘六は死にのぞみ「今日の仕儀勘六喜んで身罷つたと、長福寺の文良へお伝え下されたい」と遺言したというエピソードが記されている。当寺はもと長福寺と称し、享保元年（一七一六）観音寺と改称した。

本堂に向かって右側にある宝篋印塔（ほうききょういんとう）は、四十七士慰霊塔として古くから伝えられ、現在でも霊を弔う人が訪れている。上部に四方仏を表す種子（しゅじ・梵字）、下部に宝篋印陀羅尼経（だらにきょう）、宝永四年（一七〇七）三月吉日、長福寺六世朝山の名を刻む。

## 観音寺の築地塀（ついでん）

観音寺境内南側路地沿いに建てられた塀。寺町谷中の象徴的存在。幕末の頃造られ、現存する築地塀は長さ三七・六メートル、高さ二・〇六メートル。（「谷中歴史散策」パンフより）

《寿老人》 狩野芳崖墓（台東区史跡） 台東区谷中五丁目二番二十二号 長安寺

明治初期の日本画家で、文政十一年（一八二八）長府藩御用絵師狩野晴皐（せいこう）

の長男として、長門国長府（現、山口県下関市）に生まれる。十九歳の時江戸に出て、狩野勝川院雅信（しょうせんいんまさのぶ）に師事。橋本雅邦とともに勝川院門下の龍虎と  
うたわれた。

明治維新後、西洋画の流入により日本画の人氣は凋落し、芳崖は窮乏に陥ったが、岡倉天心や米人フェノロサ等の日本画復興運動に加わり、明治十七年第二回内国絵画共進会で作品が褒状を受け、次第に当時の美術界を代表する画家として認められた。芳崖は狩野派の伝統的な筆法を基礎としながら、室町時代の雪舟・雪村の水墨画にも傾倒、さらには西洋画の陰影法を取り入れるなどして、独自の画風を確立した。その代表作「悲母観音図」「不動明王図」（ともに東京藝術大学蔵）は、いずれも重要文化財である。

墓所は長安寺墓地の中ほどにあり、明治二十年没の妻ヨシとともに眠る。また、本堂前面には芳崖の略歴・功績を刻んだ「狩野芳崖翁碑」（大正六年造立）が建つ。

平成五年、台東区史跡として区民文化財台帳に登録された。

平成八年七月

台東区教育委員会

## 長谷川一夫の墓

谷中墓地

流し目と鼻にかかる語り口で知られ、美男の代名詞にもなった昭和の時代劇の大スター。

東京都指定史跡

## 天王寺（てんのうじ）五重塔跡

所在地 台東区谷中七丁目九番六号

指 定 平成四年三月三〇日

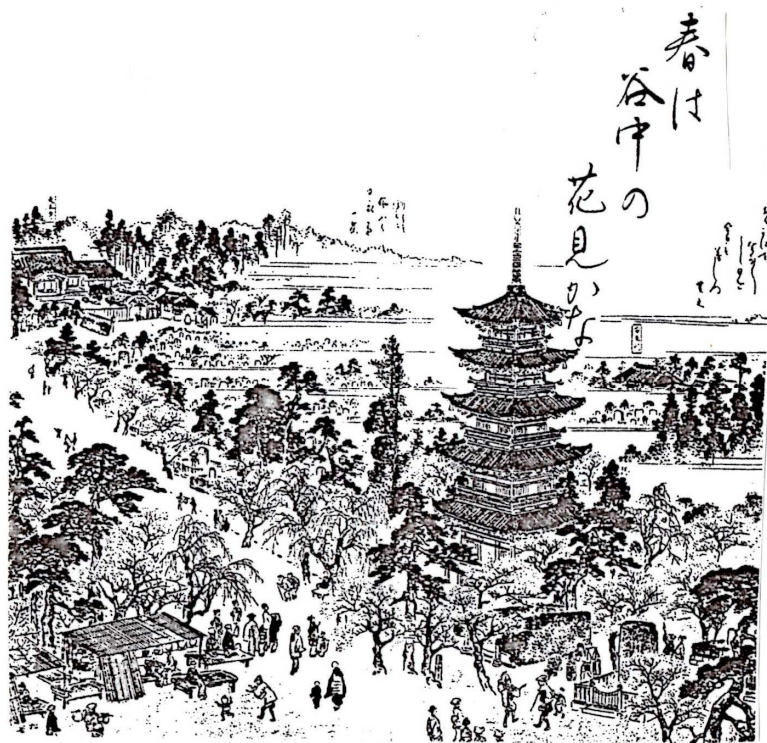
谷中の天王寺は、もと日蓮宗・長耀山（ちようようざん）感應寺（かんのうじ）尊重院（そんちよういん）と称し、道灌山の関（せき）小次郎長輝（ながてる）に由来する古刹である。元禄十二年（一六九九）幕命により天台宗に改宗した。現在の護国山天王寺と改称したのは、天保四年（一八三三）のことである。最初の五重塔は、寛永二十一年（正保元年・一六四四）に建立されたが、百三十年ほど後の明和九年（安永元年・一七七二）目黒行人坂（ぎょうにんざか）の大火で焼失した。罹災から十九年後の寛政三年（一七九二）に近江国（滋賀県）高島郡の棟梁八田（はった）清兵衛ら四十八人によって再建された五重塔は、幸田露伴の小説『五重塔』のモデルとしても知られている。総檜造りで高さ十一丈二尺八寸（三四・一八メートル）は、関東で一番高い塔であった。明治四十一年（一九〇八）六月東京市に寄贈され、震災・戦災にも遭遇せず、谷中のランドマークになっていたが、昭和三十三年七月九日放火により焼失した。現存する方三尺の中心礎石と四本柱（しほんばしら）礎石、方二尺七寸の外陣四隅柱（よすみばしら）礎石及び回縁（まわりえん）の東石（つかいし）二十個、地覆石（じふくいし）十二個総数四十九個はすべて花崗岩で



ある。大島盈株（えいしゅ）による明治三年の実測図が残っており復原も可能である。中心礎石から金銅硝子荘舎利塔（こんどうがらすそうしゃりとう）や金銅製経筒（きょうづつ）が、四本柱礎石と外陣四隅柱からは金銅製経筒などが発見されている。

平成五年三月三十一日 建設

東京都教育委員会



谷中五重塔

### 《毘沙門》護国山天王寺（ごこくさんてんのうじ）台東区谷中七丁目十四番八号

日蓮上人はこの地の住人、関長輝（ながてる）の家に泊まった折、自分の像を刻んだ。長輝は草庵を結び、その像を奉安した。伝承による天王寺草創の起源である。一般には、室町時代、応永（二三九四〜一四二七）頃の創建という。『東京府志料（しりょう）』は「天王寺 護国山ト号ス 天台宗比叡山延暦寺末 此寺ハ本（もと）日蓮宗ニテ長輝山感応寺ト号シ 応永ノ頃ノ草創ニテ開山ヲ日源トイヘリキ」と記している。東京に現存する寺院で、江戸時代以前、創始の寺院は多くない。天王寺は都内有数の古刹（こさつ）である。江戸時代、ここで富（とみ）くじ興行（こうぎょう）が開催された。目黒の滝泉寺・湯島天神の富とともに江戸三富と呼ばれ、有名だった。富くじは現在の宝くじと考えればいい。元禄十二年（一六九九）幕府の命令で、感応寺は天台宗に改宗した。ついで天保四年（一八三三）、天王寺と改めた。境内の五重塔は、幸田露伴の小説『五重塔』で知られていた。しかし昭和三十二年七月六日、惜しくも焼失してしまった。

平成四年十一月

台東区教育委員会

## 銅造釈迦如来坐像（台東区有形文化財）

台東区谷中七丁目十四番八号 天王寺

本像については、『武江（ぶけい）年表』元禄三年（一六九〇）の項に、『五月、谷中（やなか）感応寺（かんのうじ）丈六仏（じょうろくぶつ）建立、願主未詳』とあり、像背面の銘文にも、制作年代は元禄三年、鑄工は神田鍋町に住む大田久右衛門と刻まれている。また、同銘文中には「日遼（にちりょう）の名が見えるが、これは日蓮宗感応寺第十五世住持のことで、同寺が天台宗に改宗して天王寺と寺名を変える直前の、日蓮宗最後の住持である。

昭和八年に設置された基壇背面銘文によれば、本像は、はじめ旧本堂（五重塔跡北方西側の道路中央付近）右側の地に建てられたという。『江戸名所図会（めいしよぜ）』（天保七年（一八三六）刊）の天王寺の項には、本堂に向かって左手に描かれており、これを裏付けている。明治七年の公営谷中墓地開設のため、同墓地西隅に位置することになったが、昭和八年六月修理を加え、天王寺境内の現在地に鉄筋コンクリート製の基壇を新築してその上に移された。されに昭和十三年には、基壇内部に納骨堂を増設し、現在に至る。

なお、「丈六仏」とは、釈迦の身長に因んで一丈六尺の高さに作る仏像をいい、坐像の場合はその二分の一の高さ、八尺に作るのが普通である。

本像は、明治四十一年刊『新撰東京名所図会』に「唐銅丈六釈迦」と記され、東京のシンボリックな存在「天王寺大仏」として親しまれていたことが知られる。

平成五年に、台東区有形文化財として、区民文化財台帳に登録された。

平成八年三月

台東区教育委員会

## 川上音二郎の銅像跡地

谷中墓地

新派の祖。明治の自由民権運動で活躍し、後に時世風刺やオッペケペー節で有名となる。

## 高橋お伝の墓

谷中墓地

古着屋吉蔵殺しをするなど毒婦として知られ、日本で最後の斬首を明治十二年に執行。

## 徳川慶喜の墓

谷中墓地

徳川幕府最後の第十五代将軍。平成二十年のNHK大河ドラマ「篤姫」に登場。

## 《大黒》護国院

東区上野公園十番十八号 護国院

護国院は、天海の弟子生順（しょうじゅん）が、釈迦堂の別当寺として、現在の東京国

立博物館の右手裏に開創した。承応二年（一六五三）・延宝八年（一六八〇）に寺地を西方へ移転し、さらに、宝永六年（一七〇九）現在地に移った。延宝八年・宝永六年の移転は、それぞれ四代将軍家綱霊廟・五代将軍綱吉霊廟の建立にともなうものである。また、昭和二年、第二東京市立中学校（現、都立上野高校）建設にともない、本堂を現在の位置に移した。

現存する本堂は釈迦堂とも呼ばれ、享保七年（一七二二）三月の再建。間口七間（十八・二メートル）、奥行五間（十三・六メートル）。唐様（からよう）の建築で、中央奥の須弥壇（しゅみだん）に本尊釈迦三尊坐像を安置する。また、大黒天画像は三代将軍徳川家光から贈られたものと伝え、谷中七福神のひとつとして信仰をあつめている。

庫裏（くり）の一階部分は、昭和二年の新築。東京美術学校（現、東京藝術大学美術学部）教授岡田信一郎の設計で、各間取りは機能的に配置されている。昭和初期の住宅建築の風潮を良く伝えており、平成十三年、国登録有形文化財に指定された。

岡田は、東京美術学校・早稲田大学で設計教育に携わるかたわら、旧鳩山一郎邸（大正十三年竣工）・歌舞伎座（同年竣工）等を手がけ、和風建築の設計に手腕を発揮した人物である。

平成十四年三月

台東区教育委員会

## 暗闇坂（くらやみざか）

江戸時代からの古道。周辺には何もなく真の闇となり、不気味なところであった。

## 森鷗外旧居跡

台東区池之端三丁目三番二十一号

森鷗外は文久二年（一八六二）正月十九日、石見国（いわみのくに）津和野藩（つわのはん）典医森静男の長男として生まれた。本名を林太郎という。

明治二十二年（一八八九）三月九日、海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚し、その夏に根岸からこの地（下谷区上野花園町十一番地）に移り住んだ。この家は、現在でもホテルの中庭に残されている。

※ホテルとは、「水月ホテル鷗外荘」をさす。

同年八月に『国民之友』夏季附録として、『於母影（おもかげ）』を発表。十月二十五日に文学評論『しがらみ草子』を創刊し、翌二十三年一月には処女作『舞姫』を『国民之友』に発表するなど、当地で初期の文学活動を行った。一方、陸軍二等軍医正に就任し、陸軍軍医学校教官としても活躍した。

しかし、家庭的には恵まれず、長男於菟（おと）が生まれた二十三年九月に登志子と離婚し、翌十月、本郷区駒込千駄木町五十七番地に転居していった。

平成十五年三月

台東区教育委員会



## 国際ソロプチミストとは

名称の語源はソロとオペティマというラテン語で、女性にとつて最良のものという意味です。世界中一二ヶ国、約一〇万人の会員を有しております。起源は一九二一年一〇月三日、アメリカのオークランドです。当初は（「当所は」の誤りか）一九六〇年七月二日、日本で最初に認証された東京クラブゆかりの地です。管理職、専門職に就いている女性の世界的組織で世界平和、人権と女性の地位を高める奉仕活動をしています。

二〇〇一年六月二五日

国際ソロプチミスト東京

※ 掲示板は横書きですが、これを縦書きにし、数字も漢数字になおしました。

## 《弁天》 弁天堂

台東区上野公園二番

寛永二年（一六二五）天海僧正（てんかいそうじょう）は、比叡山延暦寺にない、上野台地に東叡山寛永寺を創建した。不忍池（しのばずのいけ）は、琵琶湖に見立てられ、竹生島（ちくぶしま）に因んで、常陸（ひたち、現茨城県）下館城主水谷（みずのや）勝隆が池中に中之島（弁天島）を築き、さらに竹生島の宝巖寺（ほうごんじ）の大弁才天を勧請（かんじょう）し、弁天堂を建立した。

当初、弁天島へは小船で渡っていたが、寛文年間（一六六一〜七二）に石橋が架けられて自由に往来できるようになり、弁天島は弁天堂に参詣する人々や行楽の人々で賑わった。

弁天堂は、昭和二十年の空襲で焼失し、昭和三十三年九月に再建された。弁天堂本尊は、慈覚大師の作と伝えられる八臂（はっぴ）の大弁才天、児玉希望（こだまきぼう）画伯による「金童」の図が画かれている。また、本堂前、手水鉢（ちようずばち）の天井に、天保三年（一八三二）と銘のある谷文晁による「水墨の童」を見ることが出来る。

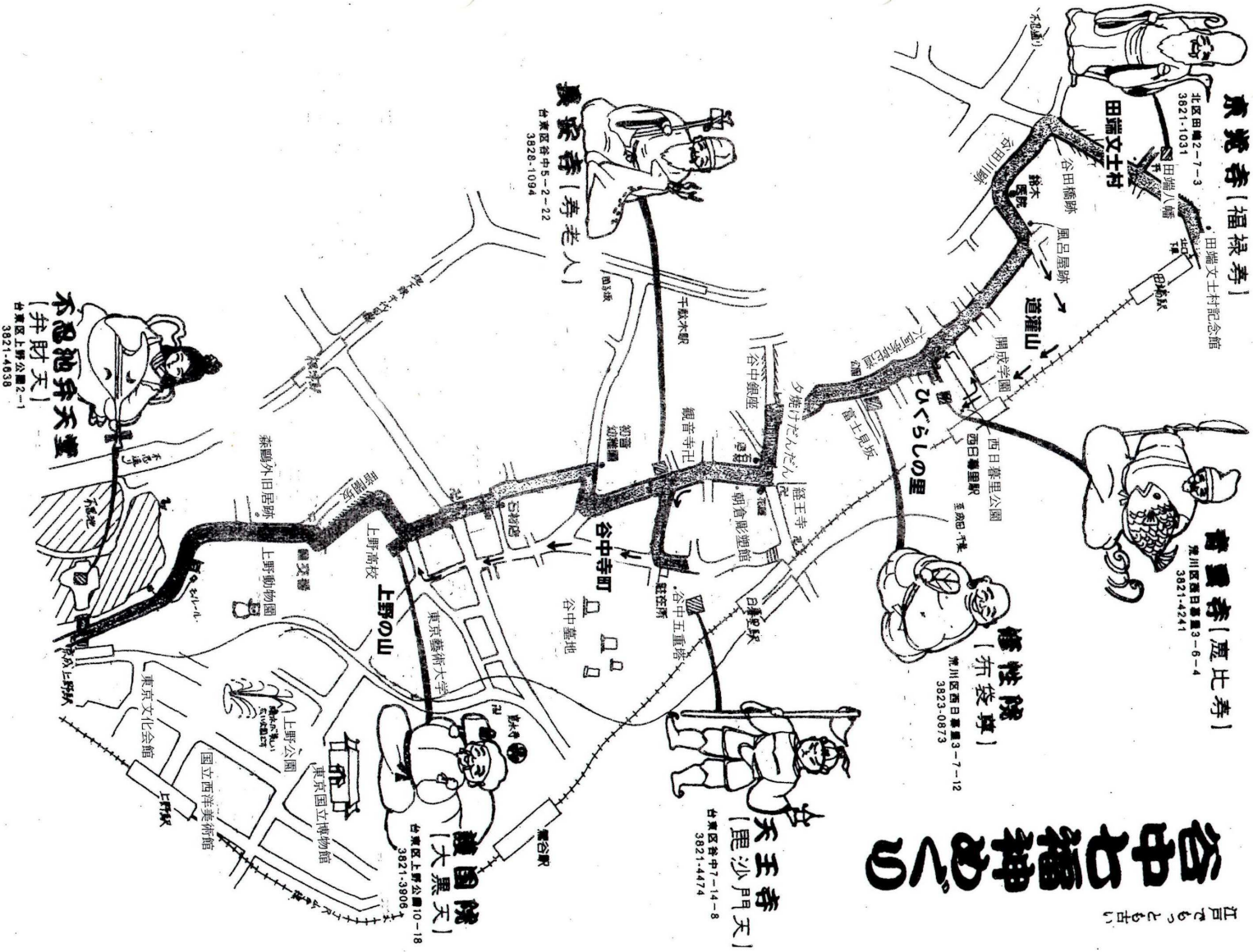
大祭は、九月の巳の日で、巳成金（みなるかね）という。

平成十年三月

台東区教育委員会

江戸でもっとも古い

# 谷中お稲神めぐり



**東光寺** [福祿考]

田端文土村記念館  
北区田端2-7-3  
3821-1031

**田端文土村**

田端八幡  
田端  
谷田橋跡  
風呂屋跡  
道灌山  
開成学園  
西日暮里公園  
西日暮里駅  
皇太后苑  
夕焼かんだん  
谷中銀座  
千駄木駅  
観音寺址  
朝倉彫塑館  
皇王寺  
白鷺塚  
谷中五重塔  
谷中墓地  
谷中寺町  
上野の山  
上野動物園  
上野公園  
東京国立博物館  
東京文化会館  
国立西洋美術館

**青賣寺** [恵比考]

常川区西日暮里3-6-4  
3821-4241



**権性院**

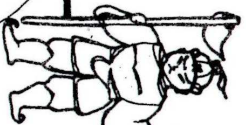
[布袋尊]

常川区西日暮里3-7-12  
3823-0873



**天玉寺** [天]

台東区谷中7-14-8  
3821-4474



**真寂寺** [寿老人]

台東区谷中5-2-22  
3828-1094



**不忍池弁天堂**

[弁財天]  
台東区上野公園2-1  
3821-4638



**護国院** [大黒天]

台東区上野公園10-18  
3821-3806

